

「もとはこちら」のお話し

№48 今月のテーマ

死刑 そして真の救い



平井謙次作 色紙

想った事を 想われ
言った事を 言われ
した事を される

(平井謙次作 日めくりカレンダーより)

裁判員裁判が導入されてから初めてとなる、重大事件の裁判がありました。殺人を犯した場合、殺害した相手が一人の場合は余程の事がない限り、死刑になる事はないようです。しかし、今回の耳かき殺人事件では二人の人を殺しているという事から、死刑が求刑されていたのです。一般市民の中から選ばれた裁判員たちが、悩みに悩んだ末に出した結論は、死刑ではなく無期懲役でした。殺人犯に対して生きる事を求め、そして「自分が死ぬその瞬間まで、考え続けてほしい」と強く訴えかけたという事です。

北原ゆり筆

死刑とは、国家が認める殺人行為です。法の名の下、もう一つ国家が認める殺人がありません。それは戦争です。自国の人に、他の国の人を殺せと命令し、その命令に従わない人は国家に対する犯罪者となります。しかし今の日本は憲法によって戦争を放棄していますから、私達が戦争のために人を殺せと国から命令される事はありません。改めて考えてみれば、人を殺さなくても良いと保障されている私達日本人とは、本当に幸せな国民だと思います。しかし実は、先進諸国の殆どの国が死刑を否定し、死刑を禁じているその中で、人が人を殺す事その残虐さを、その愚かさを、その悲惨さを身をもって深く学び、戦争を放棄したこの私達日本人が、これは別だといって、人が人を殺す事を認めているのが、死刑です。ひと言で言えば、人は人を殺しても構わないと言っているのです。

結果として今回の裁判では、死刑が回避されました。理由はいくつか挙げられています。かつての永山事件がきっかけで出来た永山基準も、その判断材料のひとつになったようです。しかしそれらの数々の理由を超えてなお、裁判員たちが目の前にいるその殺人犯を死刑にしなかった一番の理由は、「自分は、人殺しにはなりたくない」という、誠に単純で、しかも自然の理にかなった、人間としての当然の想いが根底にあったからではないかと思えます。

「場合によっては、人は人の命を奪っても構わない」という考え方が、今の死刑制度を成り立たせているのですが、いかなる場合であっても、人が人を殺す事など、あってはならない筈です。唯一、正当防衛の場合のみが、赦される最大限のものです。

死刑は、れっきとした殺人行為

「人間が犯す最大最悪の罪が、殺人である」と断定し、「人は、人を殺してはならぬ」と厳重に戒めているこの人間が、その理念を真正面から否定し、「人は、人を殺しても良い」とするのが戦争と死刑です。自分達が作った法律の下でなら、人を殺そうが何をしようが、それは赦されるという考え方です。



しかし法がどうであれ、人が人を殺すという行為において、戦争や死刑が殺人行為である事に違いはありません。

法には、絶対の自然の法と人間の作った法があります。

人間の作った法は、国により時代により事情によって、次々と変わっていくものです。勿論、人間が作った法であっても、それが存在する限りは、法は守られなければならないのは当然です。

しかしその人間の作った法を守る以前に、絶対の法である自然の働きによって私達一人ひとりとは生かされ、そして守られているという事実を知らねばなりません。

ですからもしもこの自然の法に背くような事をすれば、私達人間は、良心の咎めという形で心に大きな苦痛を感じる様になっているのです。例えば戦争で人を殺すように命じられた時などでも、心が正常な状態では、人は人を殺す事は出来ません。その中でなお自然の法に逆らって人を殺せば、その記憶は心の深い傷となって、その人を死ぬまで苦しめ続ける事になるのです。戦争は終わっても、人を殺したという自分の心の傷がいえる事はありません。こういう事からも、人が人を殺すという事がいかに自然の摂理に反する行為であるかという事を、私達は学び取る事が出来るのです。

裁判員たちは、「人は、人を殺してはいけない」という絶対の自然の法の存在を、心の奥深くで感じ取っていた筈です。そのために自分達が人殺しとなる事を、できることなら回避したいと強く思ったのではないのでしょうか。

結果に対しては裁判所が責任を持つ、と言われたそうですが、これは責任の問題ではなく、人間としての心の問題です。ですからもしも今回死刑を認めていたならば、彼ら裁判員達はこの先どれ程の精神的な苦悩を背負って一生を生きて行かなければならなかった事かと思えます。

多分その苦しみは生涯癒えることなく、死ぬまで彼らの心を傷つけ続けた事でしょう。

なぜなら、人は人を殺すようには出来ていないからです。

命は数ではない

命そのものの観点からいえば、罪を犯した人が、その事を後悔し反省しているかという事と、その人の犯した罪の大きさ深さとは直接関係ありません。また殺した人数も、罪の深さ大きさとは直接関係ありません。唯一問題となるのは、「人が人を殺した」という行為、その一点です。

命は数で数えるものではありません。その事については、例えば自分が殺されるといふ場合の事を考えてみれば、誰でも分かる筈です。



たまたま殺されたのが自分一人であつた場合は、今の法律では犯人の罪は軽くなります。しかし誰かと一緒に殺された場合は、相手の罪は重くなるのです。一人で殺されようが誰かと一緒に殺されようが、「自分が殺されて死ぬ」「自分の命が無くなる」という事実においては、なんら変わりはない筈です。しかし今の法律では、一人の人の命の重みというものを、数の論理で捉えているのです。ですから今の法律のもとでなら、殺されそうになった人が非常に幼い魂の持ち主であつた場合には、自分を殺そうとする犯人を死刑にするために、「自分以外の誰かも、自分と一緒に殺される事を望む」というような、恐ろしい気持ちを持つ事になりかねないのです。犯人への仕返しのために、第三者の巻き添えの死を望むという事です。ありえない話の様ですが、しかし今の法律では、殺された命の数によって、犯人が死刑になったりならなかったりするのですから、絶対には言い切れない話です。

命というものは、数がまともれば値打ちが上がり、一つだけでは価値は低いという様なものでもありません。そしてまた一つ二つと数で数えるようなモノではありません。

なぜならば、一人の命はその人一人だけのものではないからです。一人の命は全ての人の命と繋がりがあい、結ばれあつて一つとなつて生きているのです。孤立し一人だけで存在している命などというものは、どこにもありません。全ての人の命は、根のところで深く繋がりがあつていゝのです。

そして次に、殺人というのは、後悔し反省しさえすれば、それで罪が軽くなり、場合によっては罪が消えて無くなるという様な、そんなものではありません。何をもつてしても、決して罪が軽くなつたり消えたりする事はないというのが、殺人という行為です。なぜなら、死んだ命は再びよみがえる事がないからです。

だからこそ、殺人は、最大最高の罪悪なのです。

人間の本质

人間というものは生まれながらにして全ての人に、良心という神仏に通じるすばらしい心の種が備わつております。しかし不幸にしてそういう心の種が育つような環境に置かれず、人間としての正しい心の教育を受けられずに育つた人は、人間としての精神状態が未熟なままで肉体だけが大きくなり、残念ながら罪を犯すような事になる場合があるのです。

教育の大切さは今更の感がありますが、今でも幼い子供に、「悪い事をする」と、おまわりさんに捕まるよ」等と教えるような愚かな親がおります。「捕まるから悪い事をするな」と教えれば、子供は「捕まらないようにすれば良い



のだ」と考える様になります。「死刑になるから人殺しはするな」というのも、全く同じ事です。

人を殺すような不幸な人間を生み出さない為には、幼児の頃から正しい心の教育をし、愛情を持ってせつする事が大切です。

「悪い事をする」と、誰が見ていなくても、自分自身が見ている。人は騙せても自分の心は騙せない。人も自分も必ず不幸になるから、悪い事をしてはいけない」と教え、

「人の喜ぶ事をするのが、結局は自分の為にも他人の為にもよい事なのだ」と教え、育てるべきなのです。

そして人間とは本来どういうものであり、どう生きたら良いかという事を、先ず大人である私たちがしっかりと学び、自分自身が間違った考え方や生き方を正していかなければならないのです。

子供というのは、大人を見て育っていくものです。ですから子供に教える前に、まず自分です。その上で子供には美しい自然の姿や情愛に満ちた動物の親子の姿、そして努力する人間の素晴らしき姿などにふれさせ、生き物全体的の中に宿る命の営みの素晴らしさに気付かせていけば、簡単に人を殺すような残酷残忍な人間にはならない筈です。

大人自身が価値観を変え、物質中心的な生き方を改めると共に、人を憎まず、人を恨まず、感謝を持って人と共に生きる素晴らしさを自らが求め、そして実行する事です。

そのうえで「自分が人殺しなどをすると、あの人が本当に嘆き悲しむ」と思ってもらえる様な、そういう人に自分になる事です。

犯罪に走ろうとする人にとっては、たった一人でもいいのです。自分の事を真剣に思ってくれる一人の人の存在があれば、それが犯罪への大きな、大きな抑止力になるのです。

死刑があるから犯罪に走らないのではなく、「人間として自分は殺人などできない」という心を育てる人間教育、心の教育、魂の教育こそが、何よりも求められているのです。

死刑では魂は救われない

死刑には犯罪の抑止力があるというような説がありますが、それも非常に根拠がいまいです。

現に死刑制度を廃止した欧米諸国で、凶悪犯罪が以前に比べて多くなったという話は出ていません。殺人を犯すほどに不幸な人は、死刑になる事の怖さから殺人を思い止まらるほど、冷静な状態ではありません。また、成熟し



た心の持ち主でもありません。人生に失望し、自棄(やけ)のやんばちで自暴自棄になっていたり、中には「死刑になりたい」という理由から、大勢の人を殺す様な人さえいるのです。ですから、殺人犯を死刑にする事で、誰もが安心して生きられる世界が出来るなどと思うのは、全くの妄想なのです。そうではなく、そういう不幸な殺人者を生み出さない社会を作る事こそが大切なのです。

その為には、当然死刑をも含め、何があっても殺人というような愚かな行為は絶対に認めない、許さないという社会を作らなければなりません。

片方で殺人を固く禁止しておきながら、もう片方で死刑という名の殺人を認める様な社会では、決して殺人という行為は無くなりません。「いかなる場合であっても、人は人を殺してはならない」という事を貫いてこそ、殺人がなくなる社会に近づく事ができるのです。

また死をもって罪を償わせるという考え方がありますが、死をもってしても、犯した罪が消える事は絶対にありません。犯人が死ぬ事によって被害者が生き返るのなら、話は別ですが、そんな事は絶対に起きないからです。

犯人が生きようが死のうが、罪は罪として消えることなく存在し続けるのです。ですから罪人を死刑になどしても、それで被害者が浮かべられる事はなく、誰もが空しさや、やりきれなさを感じるのです。

命で命を償う事はできません。しかし犯した罪が消えて無くなる事はなくとも、命の限り生きて更正の為の生活をし、厳しく温かい人間教育を受けることが必要なのです。そしてお詫びと償いの為に、残りの生涯を捧げなければならぬのです。

私達は生きてこそ、反省やお詫び、そして心からの深い懺悔を通して心を入れ替え、真人間となる為の修行ができるのです。

昔から「いちにん大悟すれば、九属救われる」と言います。

一人が真の悟りを開けば、数知れない人々が救われるという意味です。反対に、一人が血迷えば、数知れない人々がその事に巻き込まれ、苦しむ事になるのです。

一人ひとり、全ての人が真人間となり幸せになる為に、私達は生まれて来て、意識的無意識的の別無く、日々修行しながら生きているのです。

大なり小なり、誰でも罪を犯しながら生きています。その自分の罪を棚に上げ、大罪を犯した不幸な人を死刑という名で抹殺してしまい、それでよしとするような社会は、命を粗末にする殺人社会であり、それでは被害者は勿論の事、遺族も周囲の人もそして加害者も、全ての人が本当に救われる

事はないのです。

自分の罪に気付く人は、救われる

ところで私達の中で、「自分は殺人鬼の被害者になど、絶対にならない」と言いける人が、一人としているでしょうか。また泥棒に遭わないと言いきれる人が、どこかにいるでしょうか。そんな人はどこにもいない筈です。

私達は、昨日自分がした事のその結果を、今日体験するように、過去に自分がした事のその結果を、今のこの世で次々と体験し続けております。「誰でも殺され可能性がある」という事は、実は誰もが過去に人殺しをしていたという証拠です。殺していなければ、殺されるといふ因子を自分が持つ事がないからです。そして人を殺せばその罪は消えることなく、自分の魂の中に持ち越されていきます。そしていずれの時か、その原因にふさわしい結果を体験する事になるのです。それが誰にでも平等に当てはまる、自然の法則です。

偶然という事は自然の世界にはありません。そしてその自然の法則によって、必然の連続の中で私達は生かされているのです。

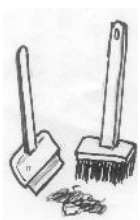
しかしこういう「した事をされる」という輪廻の世界から救われる方法があります。それは、例え八つ裂きにして殺してしまいたいと思う程憎い相手であっても、そう思う自分の感情に負けない事です。そして現実にも絶対に人を殺さない事です。殺せば殺されるといふ因子がいよいよ大きくなります。憎いと思う相手の中に過去の自分の姿を求める事です。そして相手も自分もそういう醜い争いや憎しみ、そして殺し合いの世界から早く抜け出し、共に真の目覚めを得て幸福になるようにと祈り続ける事です。それ以外に自分が救われる道はどこにもありません。

人を呪わば、穴ふたつ

罪は大いに憎む事です。しかし人を憎む事は間違いです。

罪を犯した人を前に、私達は先ずは自分自身の過去世の間違いに気付く事が必要です。そして深いお詫びの心で、今日の前にいるその人が、早く自分の行為の間違いに気付き、救われるようにと心の底から祈れるような自分になる事です。憎しみを超え相手の為にと心から祈れる、そういう自分になってこそ、自分自身が本当に救われるのです。相手の方は本当に自分を救ってくれる仏様かもしれないのです。

人の死を望む事は、相手が犯罪者であれ何であれ、最終的には自分も相手



と同じ殺人鬼になり下がる事です。理由の如何を問わず、人を呪い、人を殺すような思いや行動は、何よりも自分自身を汚し深く傷付けます。「人を呪わば、穴二つ」の喩え通り、呪う人自身が真つ先に地獄の住人となり、苦しみの埒場(るつぽ)にはまり、長く苦しむ事になるのです。

相手と自分は全く同じ命を生きているのですから、幸福を祈れば自分が幸福になり、不幸を呪えばその呪う心が自分自身を不幸にするのです。

被害者の遺族が、犯人を許せないと思う心情は人間として理解できますが、しかしその感情を乗り越えてこそ、被害者も遺族もそしてまた加害者にも、真の救われの道が開けるのです。

平井先生の教えの通り、「した事をされ、された事をまたしてしまふ」のが人間です。それが良い事なら問題ありません。しかし人から悪い事をされた場合は、それは自分が過去にしていた事だと思い、決して相手を憎んだり恨んだり、まして仕返しなどをしない事です。人の振り見て我が振り正し、深く反省し、全うな生き方をする様に心がける事です。加害者の真の幸福を祈れるような自分になってこそ、自分が心底救われるのだという事を私達は強く心に刻んでいかなければならないと思います。

見聞きする事は、見聞きするその全ての原因は、自分の中にあります。

今回の裁判員達も、決して偶然に選ばれたのではなく、選ばれるだけの深い必然性が何かあったはずで、裁判員となつて、人間の作った法律がそうなっているから等という理由で死刑を認めたりすれば、自分の魂の中に「人を殺す」といふ因子がしっかりと刻み込まれ、いつの日か今度は自分が何らかの理由で人から殺されるという可能性が高くなります。今回の裁判員達は自分達の魂を傷つける事なく終わり、本当に良かったと思います。

死刑の中からは、心の平和も社会の平和も生まれる事はありません。これからもこういう不幸な事件の裁判があり、私達が判断を求められる事もあると思いますが、人が人を殺すという事がどういふ事であるかを、よくよく考え、決して間違つた結論を出さないようにと心より祈ります。

【ご案内】

十二月の勉強会は、十二月十八日(土)午後七時からです。次回は、一月十五日(土)午後七時からを予定しています。皆様のご参加を、お待ちしております。

編集発行人

もとはこちら会 資料編集部 北原友也

専用HP

<http://www.motoha-kochira.com>

mail:

data3@motoha-kochira.com